

学会ニュース

目次

| | | |
|--------------------------|-------|---------|
| ・ 第35回大会および第36回大会について | | 1 |
| ・ 国際18世紀学会 執行委員会報告 | 王寺賢太 | 2 |
| ・ 韓国18世紀学会春季大会 日韓共同研究会報告 | 高橋博己 | 4 |
| ・ 代表幹事退任の辞 | | 6 |
| ・ 代表幹事就任の辞 | | 7 |
| ・ 事務局より | | 7 |

第35回大会および第36回大会について

今年度の第35回大会は、2013年6月22日（土）、23日（日）に一橋大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の小関武史会員をはじめ、一橋大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題（「18世紀の〈地下〉を掘る」）のコーディネーター寺田元一会員およびほかの発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第36回大会は福山市立大学で開かれる予定です。開催校責任者は堀田誠三会員です。詳細は追ってお知らせします。

2012年度国際18世紀学会幹事会報告

王寺賢太（国際幹事・京都大学）

2012年度の国際18世紀学会(以下SIEDS)幹事会は、2012年8月23日、カナダ・モントリオール市のケベック州立図書館で行なわれた。現在のSIEDS会長のマルク＝アンドレ・ベルニエのお膝元である。私自身、2006年、ケベックとトロワ・リヴィエールで開催された若手セミナーに参加して以来のカナダ・ケベック訪問だった。ベルニエはその時の若手セミナー組織責任者である。

会議では特にベルニエ会長から前年度新たに選出された現在の幹事会の運営方針が示された。その三つの骨子は、1) SIEDSの構成員となる各国学会の組織、2) SIEDSのインターネットサイトの刷新、3) SIEDSの会則のいくつかの刷新である。

1)に関しては、リューゼブリンク副会長を責任者として、南米・東中欧・トルコおよびマグレブ諸国で活動休止状態にある各国学会を再活性化したり、新たに各国学会を組織したりすることが模索されている。今回、ブラジルからサンパウロ大学のマリア・グラシアス・デ・ソウサが幹事会の互選メンバーとして選出されたのもその一環である。また今回の幹事会では、2001年以来休止状態にあったアルゼンチン18世紀学会が別組織として再結成されたことが報告され、SIEDSの新たな「構成学会 *société membre*」として承認された。また、ベルギーのフランス語圏の18世紀研究者が組織したワロン学会についても、SIEDSの「連携学会 *société associée*」とすることが承認された。より多くの18世紀研究者の交流の場を作り、18世紀研究の発展を図るSIEDSの目的に合うという判断に基づく決定である。

アジアに関しては、SIEDSと中国・韓国の学会との関係が近年途切れていることに憂慮が示された。私も会議で指摘した通り、特に中国学会に関しては「18世紀研究」の意味するところが欧米とはまったく異なっており、一口に国際学会と各国学会の連携の強化では済まされない問題がある。圧倒的に西欧文化研究者が多数を占める日本18世紀学会にとっても無縁ではない問題である。韓国学会との連携については、近年日本の学会との関係が深まっていることを報告した。日本18世紀学会では、この韓国学会との連携強化に主導的な役割を果たしてきた長尾伸一会員が新代表幹事となり、名古屋の学会員たちが幹事会の運営に中心的に携わるようになったこともあり、今後積極的にSIEDSに働きかけて、少なくとも東アジアの18世紀西欧文化研究者のネットワークの組織に向けてなんらかの提案を行なうべきところかもしれない。

次いで2)に関しては、ケベックのラヴァル大学に勤務するパスカル・バスティアンを中心に近年ISECSのインターネットサイトの充実が図られてきた。そのISECS-directの会員名簿の内容の更新や各国学会の催しの告知などについては、サイト管理者ネルソン・ギルバートに情報提供するよう呼びかけがあった(nelson.guilbert@uqtr.ca)。また、これとは別に、ベルニエ会長がトロワ・リヴィエール大学から得た補助金でインターネットサイトを通じて幹事会選挙が行なえるようにISECSのサイトを刷新することが提案され、承認された。これに伴って、インターネットサイトが現在のラヴァル大学からトロワ・リヴィエール大学に移転することも承認されている。

最後に、3)に関しては、モンペリエ大会総会で議論的となったISECS幹事会メンバーの任期について、追加条項をISECSの内規に付け加えることが決定された。その要点は、①ISECS幹事会メンバーのうち、選挙で選ばれた者の任期は最大12年とすること。②ISECSは各国学会に対し、各国学会の代表（日本18世紀学会で言う「国際幹事」）としてISECS幹事会に加わる者の任期を同じく最大12年以下とするよう推奨すること。ただし、各国学会はその代表の選出に関しては独自の基準で自由に行なうことができること。③以上の二点を踏まえつつ、ISECSは幹事会メンバーの更新と各国学会からの代表の参加という二つの要請を満たすよう留意することの三つである。今後の日本の学会の運営にも関わるので注意されたい。

そのほかの詳細はISECSのサイトに公開されている今年の幹事会の議事録にゆずる (http://www.isecs.org/isecs_sieds/pdf/fr/2012_minutes_ec_Montreal_23-08-12_f.pdf)。財政に関しては、ISECSは現在のところ年間120000～160000ポンドの収入があり、毎年3000～4000ポンドの黒字を出しながら、この黒字分を四年に一度の国際学会開催時に若手研究者の旅費支給に充てている状況であり、2011年度の財務状況もこの大枠にしたがっていることを日本の学会員に報告しておく。また、幹事会開催の翌日には、モントリオール市のシャトー・ラムゼーで、18世紀フランスとケベックの刑法・刑罰の歴史の優れた研究者であるパスカル・バステリアンの司会のもと、「18世紀における罪と罰」と題された小さなシンポジウムが開かれたことも追記しておく。かつてのフランス・インド会社のケベックにおける本拠が置かれた小さな館の、「インドの部屋」と呼ばれるホールでの開催だった。

最後に、私的な感想をいくつか。夏休みをアルゼンチンのブエノスアイレスで過ごした後、ニューヨークを横断して飛行機を乗り継いでモントリオールに入ったから、アメリカの南の端から北の端までそれぞれ異なった印象の街を丸一日がかりで通過することになったのはちょっとした経験だった。なにより、モントリオールに着くなり大きく澄んだ青空が広がるのが実に爽快で、その後、街中で店の人などの強いケベックなまりのフランス語を聞くのも心地よかった。フランス語を母語として話しつつ、フランスのヘクサゴンとは距離のあるケベック人の感覚が、フランス語を外国語として話す自分には開放的に感じられるのかもしれない。ただし、モントリオールは英仏バイリンガルの街で、それゆえに幹事会が行なわれた図書館にも同時通訳者のブースがあり、おかげで今回の幹事会は普段の半分の時間で終了したのである！

国際18世紀学会会長をベルニエが務めたり、*Diderot Studies*の編集をラヴァル大学の研究者が担ったり、フランス18世紀研究に関しては近年ケベックの研究者たちの貢献は目覚ましいものがある。七年戦争によってフランス領からイギリス領に移ったケベックでは、18世紀の歴史が地域の文化的アイデンティティと直接結びついていることにも関係があるのだろう。とはいえ、この18世紀の記憶が文化財保護や再建を伴いながらさかんにクローズアップされるようになったのは1976年のモントリオール・オリンピックの後のことだという。ケベックにおける独立運動の勃興や、ケベックをひとつの拠点とする「多文化主義」(C. テイラー)の興隆とも相即する事態である。おそらく、ベルニエがISECSの「国際化」路線を追求する背景にも多分にこの「多文化主義」的な理想の追求という意図が働いているはずなのだ。

だとすると、ISECSの歴代会長を並べてみると、それなりに「18世紀研究」の移ろいも感じとられると言いきかかもしれない。そんなことを考えたのは、しばらく前に会長を務めていたモンテスキュー研究の大御所アルベルト・ポスティリオーラから、若い頃グラムシのアンソロジーを編んだことがあると聞かされて驚いたせいもある。一方、マラーの知的伝記にとりくんでいると教えてくれた、前前会長のキース＝マイケル・ベイカーは、言わずと知れた、フランス革命史研究における「修正派」の大立物の旗頭を務めた大立物の一人である。その後を受けて、今度はケベックから多文化主義者が新会長になったというわけだ… ともあれ、そうした多様な思想的・政治的潮流が一堂に会しながら18世紀研究という一点でつながっているのが、このISECSの面白いところでもある。

韓国18世紀学会春季大会 日韓共同研究会報告

高橋博己（金城学院大学）

これまでも日韓双方の学会に招き招かれて、一人二人の発表は行われてきたが、今年の韓国18世紀学会の春季大会は、鷺見洋一会員を筆頭に、寺田元一・逸見龍生両会員が百科全書関連の、長尾伸一会員が公共知について、不肖高橋が多少場違いな通信使がらみの両国の篆刻について、総勢5名が発表するという、日韓両学会始まって以来の試みが成功裏に終わった（と思う）。直接の前史としては、昨年、韓国から安大会・金時徳両氏を名古屋に招いて研究集会をもったさい、安氏の韓国百科全書の、金氏の木村兼葭堂についての発表を興味深く聴いた参加者が、この流れで来年は共催で百科全書をテーマに韓国で学会をとということになった次第。

こうして5月10日、私どもは仁川空港から直通のリムジンで降りたところがソウル大学校のホーム教授館という交通至便のゲストハウスに集結し、歓迎会の美酒に酔うことになった。翌日は朝から順調に運営される学会を楽しみ、合間にはカプチーノを喫しながら旧交を温め、学会終了後は大学近くの韓国料理店でソウルの夜が更けていったのである。会場には市民の姿もちらほら、逸見会員はそうした年配の参加者の一人から感動的な植民地時代の日本人教師にまつわる佳話（！）を聞かされたと聞き及んで、不幸な時代のせめてもの救いとして印象にのこった。

ところで、これまでの体験から言えば、今回の諸発表が日韓双方に影響を与え合うには、しばらく時間を要するだろう。私事で恐縮ながら、学会発表がきっかけになって、資料交換に至り、双方の展望が開かれたことは一再ではなかった。水田洋先生の呼びかけで韓国学会との交流が始まって10年が経過し、いまや（ようやくと言うべきか）両学会が協力して研究叢書を編もうという段階にたどり着いた。すでに大石和欣、橋本周子両会員は韓国学会の電子版にエッセイを寄稿し、好評を博していると聞く。また今秋の韓国学会のテーマは庭園だそうで、安西信一会員の招待講演が予定されている。

未来を語って、謝辞を忘れるところだったが、今回もまた現会長の安大会先生はじめ、開催校の鄭炳説先生、予稿集の翻訳から当日の同時通訳まで大活躍の金時徳氏と杉山豊氏には感謝の念、切なるものがある。

「韓・日本十八世紀学会共同学会 - 知識の生産・集積・交流」

日付：2013年5月10日

場所：ソウル大学シンヤン館

主催：韓国18世紀学会

後援：ソウル大学人文学研究院

<報告者>

キム・デジュン（ソウル大学・韓国文学）：『林園経済志』の空間思考

キム・テフン（全羅大学・フランス文学）：十八世紀のフランスにおける知識の流通と翻訳

鷺見洋一（慶応大学・フランス文学）：ヨーロッパ文化圏における『百科全書』の波及と変容

逸見龍生（新潟大学・フランス文学）：フランスにおける『百科全書』の生成と政治

長尾伸一（名古屋大学・イギリス経済史）：公共知の概念

寺田元一（名古屋大学・フランス文学）：近世日本の百科事典編集術－『和漢三才図会』と『厚生新編』

高橋博己（金城学院大学・日本文学）：篆刻異聞：東アジアの学芸共和国をつなぐもの - 木村兼葭堂から李太華まで

アン・デフェ（成均館大学・漢文学）：十八・十九世紀の朝鮮における利用厚生論と技術書

ノ・デホアン（東国大学・韓国史）：十九世紀の朝鮮における類書編纂の推移と特徴

キム・ソンス（ソウル大学人文学研究院・医学史）：朝鮮後期の医学知識の構造と特性

*本研究会は韓国の二大新聞で紹介された。短いながら内容や意義にまで触れているので、以下翻訳を掲載しておく。(長尾伸一)

翻訳 (ハンギョレ新聞 2013.5.8 (水) 23面 (学術面))

ディドロ生誕300年 韓・日連合学会

「18世紀を啓蒙したディドロの『百科全書』 インターネット百科事典も21世紀を変えるか？」

「百科全書派の啓蒙思想家たちに対して言われることを聞いたり、彼らの巨大な作品のうちの一巻を広げたりすると、私たちは巨大な工場の数え切れないほど多くの機械と様々な作業のあいだを散策するかのような感情にとらわれる。理解することのできない複雑な設備の前で、その機械装置のがたがたいう音を聞き、一切れの布を作るのに必要なすべてのことを考えるようになるとき、私たちは私たちが着ている服に愛着心が湧いてくるのを感じる。」

これはドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテが、18世紀フランスで出版された『百科全書』に対して言った言葉だ。キム・テフン全南大学教授(仏文学)は「思弁哲学の中心地であり、芸術を崇拝していたドイツ人たちにとって、職業、技術等の領域を含めたすべての領域へ知識の範囲を拡張し、科学に中心性を付与したフランスの『百科全書』は、見知らぬ怪物のように思われた」が、「しかしこの事典に好意的であろうと否定的であろうと、18世紀ヨーロッパの知識人たちはその影響から自由になりえなかった」と説明した。

今年『百科全書』の編集者ドニ・ディドロ(1713~84年)が生誕300年を迎える年だ。韓国18世紀学会は彼の生誕300年に合わせて、来る11日にソウル大学校人文シンヤン館において、日本18世紀学会と共同で「知識の生産、集積、交流」を主題にした連合学会を開催する。この日の学会では、キム・テフン教授をはじめとしてアン・デフェ・成均館大教授(漢文学)、鷺見洋一・慶応大学名誉教授、寺田元一・名古屋市立大学教授等の韓・日の学者たちが、『百科全書』の生成と受容、日本における百科事典の編集の方法、朝鮮の百科事典である「類書」の特性等、東西の百科事典の歴史と意味を扱った多様な論文を発表する。インターネット時代の新しい百科事典の形態として浮かんている「インターネット百科事典」の一事例として、「ネイバー知識百科」の事例も発表される予定だ。

本学会でキム教授は、「18世紀ヨーロッパの知識疎通と翻訳：『百科全書』を中心に」という報告で、「18世紀ヨーロッパでは理性の光明、知識と思想が広められることで世界を啓蒙することができるであろうと信じ」られており、「この光明の中心はフランスであり、ディドロとダランベールが主導した『百科全書』はその光の結晶体であるということが出来る」と述べる。ハン・ソンスクNHNネイバーサービス本部長は「インターネット百科事典の構築事例および方向-ネイバー知識百科」という報告で、「ネイバー知識百科はドゥサン百科との提携を開始し、専門家や公共機関、学会、出版社等との協業体系を構築して」おり、「現在まで300億ウォンを投資して、160余万の見出し語を提供している」と語る。ハン本部長は「出版社が独自に投資することが難しい知識コンテンツ生産のために、ネイバーが投資と支援を行っていく方法を持続的に実験中」であり「オンライン事典の長所を活かして、使用者と一緒に作成し、修正内容は速やかに反映できる構造にする予定」と述べる。

アン・ソンヒ記者

翻訳：加藤里紗

翻訳（東亜日報 2013.5.8（水）21面（文化面））

「啓蒙の世紀：18世紀は百科事典の全盛期」ディドロ生誕300周年 韓日学術大会

「フランスにおいて学芸が新たなものとなって以来、社会の中で普及した一般的な知識、知性ある人々の目をより深遠なる知識に向けさせた学問の萌芽には、辞典類に依拠する部分がある。このことは否定できない。」

「啓蒙の世紀」と呼ばれる18世紀フランスにおいてダランベールとともに『百科全書』編纂を主導したディドロ（1713～1784年）は、この本の趣意書で上のように説明した。『百科全書』の編集者である啓蒙思想家、ディドロの生誕300周年に合わせて、18世紀のヨーロッパ、韓国、日本で知識を生産し流通させた現象に光を当てるイベントが開催される。韓国18世紀学会が日本18世紀学会とともに11日、ソウル大学校人文大学シンヤン館にて開く春季学術大会「知識の生産、集積、交流」だ。

21世紀が他分野の知識を相互に創造的に組み合わせる知識融合の時代であるのに対して、18世紀はその基盤となる知識を集積した時代であった。このことを示す代表的な現象が、数多くの百科事典類の編纂である。18、19世紀の朝鮮でパク・ジウォン、パク・ジェガを主軸とする利用厚生学派が活発に活動したことは、学問の歴史の中で注目に値する現象だった。パク・ジェガの「北學議」、ソ・ユグの「林園經濟志」、ジョン・ヤクチョンの「茲山漁譜」が、当時出版された代表的な百科事典類である。同時期の日本では、「和漢三才図会」「厚生新編」等の百科事典類が編纂された。

偶然にも18世紀にヨーロッパと東アジアの両方で知識の集大成が完成した理由は何だろうか。アン・デフェ成均館大学漢文学科教授（韓国18世紀学会会長）は、「商業が発展し貴族の権力が縮小した時期に、かつて貴族の専有物であった知識を多くの人が共有しようとする動きが起こった。そのことが百科事典類の編纂という形で表出した」のであり、そこに「特に既存の人文的知識だけでなく、実用技術を大幅に盛り込んだことが特徴であった」とする。

学術大会では韓日の学者11名が「18、19世紀朝鮮における利用厚生論と技術図書（アン教授）」、「19世紀朝鮮における類書編纂の推移と特徴（ノ・デファン・東国大教授）」、「18世紀フランスにおける知識の疎通と翻訳（キム・テフン・全南大教授）」、「江戸時代の日本における百科事典編集術（寺田元一・名古屋市立大教授）」等の報告を行う。

シン・ソンミ記者

翻訳：加藤里紗

代表幹事退任の辞

増田 真（京都大学）

今年6月の第35回大会をもちまして、代表幹事の職を退くことになりました。4年間ともに働いてくださった幹事の方々のほか、大会の開催校責任者、発表者、司会者、査読担当者、『年報』や「学会ニュース」に原稿をお寄せいただいた方々、そして多くの会員の皆様に心からお礼申し上げます。

幸い、信頼の置ける後任が選出され、新しい幹事会の態勢もできつつあり、今後も学会の円滑な運営に何の心配もありません。これからも日本18世紀学会へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

代表幹事就任の辞

長尾伸一（名古屋大学）

今大会から私が代表幹事を務めることになりました。まさしくスーパーマンのように見事に責任を果たされた増田前代表幹事には遠くおよびませんが、幸い研究、実務の両面で傑出した、素晴らしい役員、会員の皆様にお手伝いいただくことができますので、なんとか任期を全うしていけるのではないかと考えております。

本学会は設立当初から学際研究を柱とし、先駆的で優れた成果を挙げてきました。また国際学会との連携も密接で、研究、国際交流の両面で、大変個性のある学会です。18世紀という広大で、さまざまな方向に開かれた世界を通じて、専門的、学際的、国際的、領域横断的な研究を進めていくことができる、得難い場所です。

また本学会は学会報告、投稿制度など、学会としての機能をしっかりと確立し、年々充実させてきておりますが、その反面、18世紀の任意団体のような、サロンのような、さまざまな分野、さまざまな年齢層の研究者が集い、自由な空気の中で交流や討論を行うという、有益で楽しい空間を提供しております。とくに若手研究者の皆様が臆さずご自身の見解を発表して、広い分野から意見をいただいたり、すでに業績を積み上げられたベテランの皆様が有望な後進の研究者の皆様と交流したり、さらに研究をお続けになる場として、存分にご活用いただくことができる学会だと思っております。

現在の国の財政問題や教育、研究政策を考えると、今後人文、社会分野の研究環境がいつそう悪化することも予想されます。研究の振興と研究者の育成を支えていく学会の役割も、ますます大きくなっていくと思っております。皆様一人ひとりのご協力をいただき、日本18世紀学会の発展のお手伝いをしていく所存です。どうぞよろしくお願ひいたします。



事務局より

事務局移転及び振替口座変更のお知らせ及び、会費納入のお願い

本年6月の大会をもって事務局が移転いたしました。新しい住所等はニュース末尾に掲載しております。お問い合わせ等は新事務局までお願いいたします。

また学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいております。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。事務局移転に伴い、郵便振替口座も変更となりました。今後は以下の振込口座へ会費の納入をお願いいたします。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

国際18世紀学会主催 国際若手セミナー開催情報

2014年9月8日～12日まで、イギリス・マンチェスターにおいて国際18世紀学会主催の国際若手セミナーが開催されます。このセミナーの申し込み締め切りは2014年3月14日です。詳しくは国際18世紀学会ホームページを御覧ください。（*日本事務局は受付先ではありません。ご注意ください。）

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版ではRépertoireという項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者（Pascal Bastien. admin@isecs.org）に連絡してください。

（英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。）

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りです。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

前号以来、以下の方から寄付がありました。お礼申し上げます。

| | | |
|-----|-----|---------|
| 増田真 | 10口 | 10,000円 |
| 計 | 10口 | 10,000円 |

また寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。振り込みの際は学会口座が新しくなっておりますのでご注意ください。

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・村松茂美『ブリテン問題とヨーロッパ連邦 フレッチャーと初期啓蒙』京都大学学術出版会、2013年、320p.

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願ひいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお9月より、新しいメーリングリストを稼働しております。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順): 安西信一、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、大野誠(常任幹事)、
隠岐さや香、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、小関武史(常任幹事、年報担当)、齊藤渉、
坂本貴志(常任幹事、年報担当)、武田将明、玉田敦子(常任幹事)、寺田元一(東アジア交流担当)、
長尾伸一(代表幹事)、馬場朗、逸見龍生(常任幹事、年報担当)、増田真

会計監査: 安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第73号 2013年10月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com

tel: 052-789-2380

fax: 052-789-4924

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>